



芽吹く切り株 対立の構法を解く

継承する大都市周縁部の住宅地再編計画

西村 祐人 (にしむら ゆうと)

千葉大学 工学部 都市環境システム学科



木とコンクリートの組み合わせによる住宅建築(W+RC住宅)は、地域的多様性と近代的合理性との対立の構図に協調を見いだすことがわかった。そのW+RC住宅の研究より導かれた方法論をもとに、縮小する郊外において、既存の環境や時間を引き継いだ魅力的な住宅地像を提案する。既存住宅地の建築RC部や土木構造物などの固い社会基盤を「都市の切り株」と捉え、その地面から生えた「切り株」を土台に新たな木造の生活空間を芽吹かせる。我々の生活を支えてきた「もの」を簡単にスクラップするのではなく、それらの寿命を全うさせ、活かすことで、そこに新たな空間の可能性を獲得し、持続可能な社会における建築のあり方を見いだす。



【講評】 社会性、詩情に話題が集まりやすい作品群のなかで、堅実すぎるとの見方もできようが、以下の点で学生賞にふさわしい。まずは、調査研究をもとにした「卒論」で培った知識を、「卒制」に昇華させている取り組み姿勢。次に「切り株」が敷地単位での建築の下部構造を越え、広域の生活環境をつくるRC基盤全てに及ぶ着想の広さ。つまりランドスケープ・アーキテクチャであり、切り株(RC)の上に、風や水や緑を巻き込んだ環境集合体(木製)を芽吹かせている。第3にプレゼンテーションの巧さ。図面表現では抑制の効いたポイント色

がモノクロームを際立たせる。これから芽吹くであろう若葉や花にまで連想が及ぶ五彩が、美しい墨色に内在する。また模型にあつては、(木製)を表わすヒノキ材に対し、(RC)をグレーの素材ではなく木製=パルサで作っている。つまり(木製)と(RC)の「対立」は、敵対ではなく協調の関係にあることを模型材料に語らせているのである。そして模型が乗っている台はぐるぐる巻きのダンボール紙であり、年輪のある「切り株」のメタファー。——詩情とは雰囲気ではなく、観る側の想像力をいかに芽吹かせるか、で決まる。(審査員：柳瀬寛夫)